

犯罪の成立要件——3つの関門

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑法#7 / 動画: https://youtu.be/FN_pYfHaa0M

第2章 構成要件 ①／動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

なぜ「関門」が必要か〔短答・論文共通〕

人をナイフで刺したら、それだけで即・殺人犯でしょうか。刑法は、行為があってもいきなり有罪とは決めず、**構成要件** → **違法性** → **責任**の3つを順にチェックします。1つでも欠ければ、その時点で無罪。これが「3つの関門」です。

実は「犯罪とは何か」は、いちばん基礎のレベルでさえ学説が割れています。ただ試験では、構成要件・違法性・責任の3つを求める通説で足り、判例も実務もおおむねこれに従います。この三段階の型は、ベーリングという学者が百年以上前に示したものが土台です。

犯罪の定義〔論文〕

犯罪の定義は、短い一文ですが、そのまま答案の「型」になります。

【論文の規範】犯罪の定義 犯罪とは、構成要件に該当する、違法かつ有責な行為をいう。

かみ砕くと、①条文の型に当てはまる、②本当に悪い、③その人を責められる、の3段階。すべての刑法答案の出発点です。

第一関門 構成要件該当性〔論文〕

第一関門は構成要件該当性です。構成要件とは、各則に並ぶ「それぞれの罪の型」、つまり刑法各論の条文のことです。たとえば殺人罪なら、この条文の「人を殺した」が型です。

【条文】刑法199条（殺人罪）人を殺した者は、死刑又は無期若しくは5年以上の拘禁刑に処する。

甲が乙をナイフで刺して死なせた——「人（乙）／殺した（刺した）」で、199条の型に当てはまります。なぜ最初がこれかといえ、罪刑法定主義の現れだからです。型に当てはまらなければ、そもそも処罰されません。そして通説は、構成要件を「ふつうは違法で有責な行為を集めて類型化したもの」と考えます。だから型に当たれば、ふつうは②違法・③責任も満たすと**推定**されます。次は「例外がないか」を見ます。

なお構成要件の中身は、**客観的要素**（実行行為・結果・因果関係）と**主観的要素**（故意・過失。ほか目的犯の目的・傾向犯の傾向）に分かれ、それぞれ第2章の以降の回で深掘りします。

第二関門 違法性〔論文〕

第二関門は違法性——その行為が法的に許されない、という評価です。構成要件に当たれば、その行為はまず違法と推定されます。そこで第二関門で見るのは、**違法性阻却**（そきやく）**事由**、つまり「例外的に適法とすべき事情」があるかどうかです。代表が正当防衛。襲ってきた相手から自分や他人を守るため、やむを得ず反撃した場合で、法も「それは正しい」と認めます。だから殺人罪の型に当たっても——

【条文】刑法36条1項（正当防衛）急迫不正の侵害に対して、自己又は他人の権利を防衛するため、やむを得ずにした行為は、罰しない。

「罰しない」。型に当たっても、違法性が阻却されて無罪です。緊急避難の37条、手術などの正当行為の35条も同じ仲間です。阻却事由がなければ、初めて「違法性がある」と積極的に認定します。

第三関門 責任〔論文〕

最後の関門が責任です。責任とは「その人を非難できること」、非難可能性です。「悪いと分かって、やめられたのにやった」から責められる。それが言えなければ、責任は問えません。たとえば13歳の子。刑法は14歳未満を一律に罰しません。

【条文】刑法41条（責任年齢） 十四歳に

満たない者の行為は、罰しない。

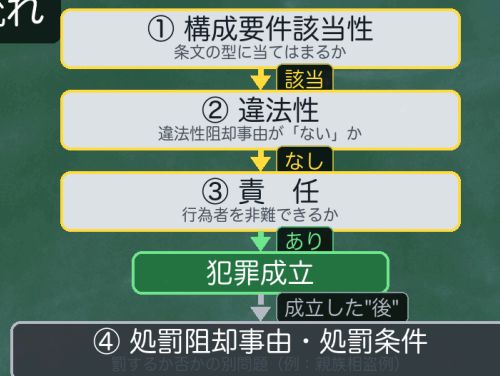
もう一つが心神喪失です。重い精神の障害で、善悪の判断も行動の制御もできない状態を指します。

【条文】刑法39条（心神喪失・心神耗弱）
心神喪失者の行為は、罰しない。 2 心神耗弱者の行為は、その刑を減輕する。

型に当たり、違法であっても、責任を問えない。だから無罪になります。刑罰は「責められる人」だけに科す——これを責任主義といいます。

なぜこの順番か〔論文〕

犯罪成立までの流れ



①～③=犯罪の「成否」
外から内へ、順に判定
1つでも欠ければ → 無罪

④=成立した「後」の層
成否とは段が違う

3つの関門は、必ずこの順で、外から内へ検討します。1つでも欠ければ、そこで無罪です。

外形である行為から、内面である非難へ——外から順に絞っていきます。

3つの関門の役割

関門	何を見るか	否定される例
① 構成要件該当性	条文の型に当たるか	そもそも型に当たらない
② 違法性	阻却事由（例外）がないか	正当防衛・緊急避難
③ 責任	行為者を非難できるか	心神喪失・刑事未成年

構成要件該当性は「型に当たるか」、違法性は「阻却事由がないか」、責任は「非難できるか」。否定される代表例までセットで押さえましょう。同じ「殺した」でも、どの関門で止まったかで結論が変わる。これが刑法の「型」です。

短答ひっかけ

- 構成要件に該当＝犯罪成立、ではない（後の関門で無罪もある）。
- 違法性は「阻却事由の有無」で見る（一から違法を立証し直さない）。
- 犯罪が成立した"後"に、罰するかどうかの別の層がある＝**処罰阻却事由**（例：親族相盗例 244条1項＝親族間の窃盗）・**処罰条件**（例：事前収賄罪 197条2項＝公務員への就任）。成否とは段が違う。
- 心神喪失（39条1項）は無罪／心神耗弱（39条2項）は減軽。刑事未成年は14歳未満（41条）。

論文の型 | 犯罪成立の検討（3関門）

1. 構成要件該当性：条文の「型」に当たるか（客観的要素＝実行行為・結果・因果関係

／主観的要素＝故意・過失）。当たれば違法・責任が推定される。

2. 違法性：違法性阻却事由（正当防衛36条・緊急避難37条・正当行為35条）がないか。なければ違法性を積極認定する。
3. 責任：非難可能性があるか。責任阻却事由（心神喪失39条1項・刑事未成年41条等）がないか。 - 外から内へ。1つでも欠ければ、その時点で犯罪不成立。

今日の地図（保存版）

- 犯罪＝構成要件該当性・違法性・責任の3関門（犯罪とは「構成要件に該当する、違法かつ有責な行為」）
- 外から内へ順に検討。1つでも欠ければ無罪
- 構成要件＝違法・有責な行為の類型（だから違法・責任は推定される）
- 成立の"後"の層＝処罰阻却事由・処罰条件

次回は第2章②「構成要件総論——要素と機能」。構成要件の3つの機能・要素の種類・確定の広がり扱います。